



Title	<書評>『少女パレアナ』（エレナ・ポーター著，角川文庫，380円）
Author(s)	パレアナ少女
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 54, p. 28-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『少女パレアナ』

エレナ・ポーター著（角川文庫380円）

この本に出会ったのは、私が中学生の頃だ
と思う。姉の本棚からちょっと拝借して読ん
だところ、なにか勇気づけられるものがあり、
私はこの本をずいぶん気に入ってしまった。
それ以来、本は姉がらずっと拝借したまま
でいる。そして、少し元気がなくなったとき
私はこの本を開くことにしている。私にと
つての、ビタミン剤なのだ。

主人公パレアナは、不遇な環境で育つが、
牧師であった父と「なんでも喜ぶ遊び」をみ
つける。それは、境遇が不幸であるほど「嬉
しい」と喜ぶゲームだ。ある時、パレアナは
人形を欲しがっていたが、慰問箱の中には松
葉杖が入っていた。パレアナはがっかりし
たが、父が「松葉杖を使わなくてもすむ健康
な両脚があることを喜ぼう」と教える。それ
がきっかけとなりゲームが始まった。

おしゃべりが好きなパレアナは、父の死後、
気難しい叔母に引き取られるが、もちまへの
純真さで、大人たちの心をほぐしていく。傷
ついたり、落胆している人に、どんなこと
からでも喜ぶことを捜しだす遊びを広める。
パレアナ自身、交通事故で歩けなくなるが、
そのことさえも「嬉しい」と言う。足がど
んなに有難いものかを知ったからだ。

中学生の頃は、「私もパレアナのように純真
な子になりたいな」と思った。しかし、大人
と呼ばれる年になると、いつの間にか高慢で
欲深く、「どうして自分だけが、こんな目に
あうの？」とひがむ自分に気付いた。こんな
とき私は自然に心の中のパレアナを捜す。私
の中のパレアナは、いつまでも少女のま
まで、私に「遊び」を教え続けてくれる
だろう。

(パレアナ少女)